

説教 『その一つを手放せないが』 山本護 牧師
聖書 コヘレトの言葉 3:9~11 / マルコ福音書 10:17~22

「金持ち男」の記述は共観福音書すべてにある。マタイは「金持ち青年」、ルカは「金持ち議員」、マルコは「金持ち男」で、内容はほぼ同一。敬虔で勤勉なその男は、イエスに「走り寄って、ひざまずいて尋ねた。〔善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか〕(マルコ 10:17)」。

金持ちだが尊大ではなく、謙虚で求道的、なかなか好男子じゃないか。イエスは答えて幾つかの律法示す(10:19)。すると彼は「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました(10:20)」と言った。敬虔に生きて来た己が自負を、噂に名高いラビ(先生)のイエスに「保証」してもらいたかったのか。いや、その自負を更に徹底させるために、直弟子になる勢いだったのだろう(10:21b)。

イエスは続けて答えた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい(10:21)」。これは厳しい。男はどう応じたか。「その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである(10:22)」。敬虔な好男子の可能性を閉ざしたのは財産であった。こうした障壁は、自分の外側にあるものではない。内側にある「一つ」なる何か(10:21)、だ。

手離せない「何か」は数多くない。私たちにも「一つ」くらいあるのではないか。イエスは「その一つを手放してから従いなさい(10:21)」と私たちにも言うだろうか。すると私たちは「悲しみながら立ち去る(10:22)」ことになるのか。多くの人は「一つ」を手放せずに、男のようになると思う。

自分に重なると、立ち去った男の行方が俄然気になる。だが、彼のその後は何も記されていない。私は想像する。男はイエスに従えなかった挫折をバネに、直弟子(出家)とは違う自分の道を模索するだろう、と。だとすれば、イエスはそれを見越して「一つを手放す」方便を語ったのではないか、と思える。イエスのまなざしがそれを物語る。「イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた(10:21)」。慈しみのまなざしに注目すると、こう感じられる。イエスは男の覚悟を試したのではなく、彼ならではの道を歩ませたのではないか、と。その結果、後代のキリスト者は、出家よりも在家の方が多くなる。

「人が労苦してみたところで何になるろう(コヘレト 3:9)」。実際、こう思うことは、ある。「コヘレトの言葉、全体に「空しく、風を追うようなこと(2:17,26)」という虚ろなムードが漂っている。だがよく味わうと厭世観ではない。「神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終わりまで見極めることは許されていない(3:11)」。

私たちは「永遠を思う」信仰をこの身に帯びている。だがそれ以上に、未知の領域を感じている。つまり信仰者は、神の未知に対して心開く。「空しく、風を追うようなこと」でも目を背けず、不可解な御心に対して心開いている。興奮や歓喜はないが、冷静で、慎ましい、真なる信仰の態度だ。

男は「悲しみながら立ち去った(マルコ 10:22)」。彼の行方は分からない。だが「見極められない神の業(コヘレト 3:11)」の内にあるだろう。キリストの慈しみのまなざしが注がれているのだから(マルコ 10:21)。



《おまけのひとつ》

混沌の海に漂う一定の秩序 縁が地になりかけ 別の縁が混沌に飲まれていく 人の生涯よりは 幾分長くとも 教会や教義は永遠の内に変容し続ける キリスト者はその刷新の真ただ中に在る